

科学と宗教、特に仏教との関係

佐々木 閑

この会はもちろんはじめてですし、こういったテーマでお話するのも実は先月の金先生の研究会に呼ばれて、そこでお話をしたのが多分生まれて初めてだと思うんです。科学と宗教、あるいは宗教同士の対話というテーマについて公でお話するケースは私の場合経歴上ほとんどございません。今日はあえて、無茶な話ですけれども、わたくしの立場からどうそれを考えるかということを少しですがお話をしたいと思っております。

最初に科学と仏教の関係性を語るに際して、仏教とはどういふ宗教かということを確認します。そのあと、科学についての近代の発展について考えます。物理学と、進化論と、生物学についてです。やはり脳科学がさきほどひとつ

のメインテーマになっておりましたから、生物学、進化論についてお話をしたいと思っております。そのあとに、科学と仏教との関係を考えたいうえで、これからの宗教がどうあるのかという方向性のお話を科学と絡めたかたちでお話ししようとおもっています。最後に、宗教と組織という問題についても、時間があればお話ししたいと思います。

それで、まず、わたくしが研究をしております、いわゆる釈迦の仏教についてです。昔は原始仏教といいましたが、私は、この宗教のことを「釈迦の仏教」と呼んでおります。今の人たちはよく上座部仏教と云う言葉を使っていますが、実はこれも正しくはございません。上座部仏教というのは今のスリランカやタイ、東南アジアのあの宗教団体を指す

のであって、それが釈迦の時代の仏教と全く同じであるということとは、ぜんぜん言えないし、呼称ありません。いろいろと制度的に変化しているところもありますので、釈迦が作った仏教を上座部仏教という名称で呼ぶことはできません。それで私は、「釈迦の仏教」という勝手な造語ですけれども呼んでおります。

それについて、簡単に説明を申し上げたいと思います。まず、釈迦の仏教の基本は何かといいますと、超越者を認めません。これは日本の大乘仏教や、いわゆる一神教の世界とはまったく概念を異にするものでありまして、外部にこの世界をつかさどる超越者はおられませんし、また、われわれを救済する者もおりません。救済する者がいるという考え方であったバラモン教を否定するために仏教が生まれできたわけですから、仏教の基本は「外部の救済者はいない」という点にあります。したがって、この世の中を動かしていく原動力は何であるかということになると、要するに神に相当する者はいないわけですから、世の中を動かす

ていく、原動力と云うのが存在しないということになります。その時に、釈迦の世界観ではこれは、「法則性」であると言います。つまり、原因と結果の連動性が次々に新しい現象を生み出していく、その流れが時間であると、いうふうに考えます。したがって、そこには言ってみれば、メカニカルでオートマチックに現象が進んでいくという世界観があります。この法則性のことを仏教では「縁起」といいます。

本質的にこれはわれわれの心のなかの因果則なのですが、やがてはそれが外界にも適応されて物質世界、太陽や月の動きも、またこれも原因と結果の関係であるというふうには拡大されていきまして、最終的には心身両面において因果則が縁起によってなりたつという、そういう世界をつくるようになります。

そこにおいてわれわれはどんな存在であるかといいますと、原則として我々はすべて平等であるということになります。つまり、私たち自身も縁起で動いていきますから、

人間のあいだの差異というものは本質的にないというふう
に考えます。その本質的に平等であるということの本義は
何かというと、平等に不幸だということでありませう。な
ぜなら救済者のいない世界にいるからです。これがもし救済
者のいる世界ならば、本質的に幸せですが、それがいない
わけですから本質的に苦難であつて、絶対苦です。これは
仏教でいう、「一切皆苦」という言葉がその現象性を端的
に表しております。

では、われわれはその絶望の中でしか生きていけないの
かという、本質的にそうだと、絶望しかありませんと
言わざるをえない。これがいわゆる輪廻の世界での絶望の
繰り返しということになります。しかし、そこからの脱出
の方法はあるのです。ここが仏教が宗教になつていくポイ
ントです。脱出の方法はあるのです。それは何かというと、
修行によつて自己の精神の内側にある悪しき要素を消すこ
とであると言います。この悪しき要素の、「悪い」という
ことの定義は何かといいますと、これは機能の問題であり

まして、どんな機能を悪と呼ぶかといへば、それによつて
業を生み出す機能を悪と呼びます。それが煩惱です。

そこで、「業」というエネルギーは何をもたらすとかと
いへば、次の生をもたらす。つまり生まれ変わった時に、
次に生まれてくる場所を決定し、そこに、慣性をあたえ
る。あとまた、さらに何年間か生きる力をあたえていく。
それが業の力です。したがつて、その業が、果てしない苦
しみを生むわけですから、業を消さなければならぬ。業
を消すためには業を生み出す源泉である煩惱の働きを消さ
なければならぬ。これが仏教でいう、悪の定義です。業
にかかわるものが悪です。

それは消せるのかといへば、それは消せるといいます。
それは自己の精神的な力、パワー、もつという瞑想です
が、瞑想という一種独特の精神状況を達成できるならばそ
のトレーニングの繰り返しによつて、その煩惱とよばれる
業を生み出す心の働き、作用を消すことができます。こう
いう構造になっております。ですから釈迦の仏教の基本は

トレーニングなんですね。為すべきことは何ですかと聞かれた場合の答えはトレーニングであるといえます。これが修行という名前前で設定されるというわけです。ですから、仏教は本質的にトレーニング集団なので、そのためには上から下へと、トレーニングの方法、スキルが伝達されなければ仏教は滅びてしまうことになりますから、仏教は厳密な教育システムを構成しなければ成り立ちません。その教育のための場所、つまり、先生と弟子が集まって一緒に教えるための場所が絶対になる。それを仏教サングという名前と呼ぶ。これが仏教僧団の存在理由であります。

ですから、仏教僧団のないところには仏教は実はないということになります。仏教という宗教の定義は「仏と法と僧」です。仏陀を信奉すること。そして、法、すなわち仏陀の説いた教え、これはつまり修行のためのマニュアルですが、それを伝えていること。そして、実際に教育制度の中でそれをいかして修行しているというその修行集団が現

前していること。これで仏法僧という仏教の定義がなりたちます。これが仏教の唯一で絶対的な定義です。どこの国へ行っても、この定義だけはタイであろうとスリランカであろうと誰もが認める定義としてなりたっております。

実はそのサングの話ですすめていくと、集団組織の話になって、これが科学者の話になっていって、お布施で生きる人々の生活はどうあるべきかということが、科学者というお布施で生きる人たちの生活とつながっていくわけなのですが、今回は組織ではなくて教えの方の話に行こうと思えます。

さきほど脳の話が出ましたので、ついでに申し上げます、瞑想によって自分の心のなかの煩惱を消すということが修行ですから、仏道修行者は朝から晩まで年がら年中自分の心を観察するということが主たる修行の内容になります。これは、今の日本の修験道をとりにいった仏教のように、走ったり火の上を歩いたりという、そんなことはいっさいないのであって、本来の釈迦の仏道修行は座ることしかしま

せんでした。

その結果それが百年五百年と積み重なっていきますと、その体験によって得られた知見というのが蓄積されるようになりまして、これが仏教哲学の基礎を作るようになっていきます。その哲学のことをアビダルマといいます。大乘仏教ではこれがありません。大乘仏教になりますと外界の超越者を認めてそこへ救いをもとめるといふ、「信仰の宗教」に変貌してしましますが、今言っておりますのはその変貌するまえの釈迦の仏教の、究極の形としての哲学の体系、これをアビダルマ哲学といいます。日本では漢字になおしてアビダルマのことを「阿毘曇」といいます。それがさらに省略されまして「毘曇」という名前と呼ばれて、南都六宗の一つが毘曇宗であります。奈良の毘曇宗、興福寺などは、本来的にそれを伝える宗派です。

従いまして、長い期間にわたる経験がありますので、そこから生まれた哲学は、科学的に実験や検証で調べたわけではありませんが、非常に洞察の深い精神構造の解明を行

っております。たとえば「脳とは物質か、内部のものか、うちか外か」という問題。これは精神と物質はどう分けられるのかという話になりますが、アビダルマ仏教では精神と物質は分けて考えるのですが、分離されたものとしては考えません。それをつなぐものがある。精神と物質をつなぐものとして、認識器官というものを設定しております。これを仏教では、眼耳鼻舌身意といいます。認識器官のことを「根」といいますので、認識器官は六種類、眼耳鼻舌身意なので、六つあってこれが六根というもので、「六根清浄」の六根です。この認識器官というものは、六番目の「意」以外はすべて、物質です。つまり目とか耳です。物質ではありませんが、外界からの情報をインプットするとそれが情報伝達経路を経てわれわれの内部にある心にその認識を映し出すということで、構成要素は物質なのですが、作用は精神だといえます。そういう根というものを中間におくことによって精神と物質が一体化された世界観になる、といわれています。

脳というものを当時のインド人は全く知りませんから、頭の中に詰まっているのはただの灰色のミソだと思っておりました。面白いですね。脳のはたらかしは重心をとるための重りだというふうに書いてありますね。頭が空っぽだと転びやすいからということになっていますが、じゃあ、考える主体はどこかと申しますと、普通ならば心臓だと考えるところなんですが、アビダルマでは全然そんなことは言わない。内部の世界は全身に遍満していると申します。全体が認識の本体なのであると。つまり眼耳鼻舌身意という六つの根から、インプットされた情報が最終的に身体全体に遍満している認識を生み出す。これを六識といいます。眼耳鼻舌身意のそれぞれの識です。最後の「意識」が私たちがコンシャスネスの訳語として使っているあの「意識」という語の語源です。仏教的な世界観からいいますと実は精神と物質は絶対に分離できません。根でつながっておりまますから。だからこそ仏教は無我なんです。我という本体はどこにもないということになる。

さて、それで、この仏教の世界観を考えますと、一面非常に科学に近いものを感じます。まず絶対的な支配者がいないということ、それから、救済者もないということ。自己努力で、自己の向上をはかるということ。それから世界が動いていくのは法則性だけに依っているという、そういう点が非常に科学的といえるかもしれません。

それで、今度は科学の話です。物理、数学、どれにしても、今度思っていましたが生物にすることにしました。進化論です。私は科学の流れをこんなふうに考えております。科学というのはもともとデカルト、ニュートンあたりからはじまって、その本質は決して神なき世界の真実発見なのではなく、神の証明であったという、これが科学が本来もっていた姿でありまして、実験や検証によってこの世の中に隠れた、われわれの目には見えない美しき法則性を発見することが、この世を造った神の存在証明になるというふう

に思っていたわけです。科学というのは決して、宗教、とくにキリスト教世界観

と相反するものではないわけです。ニュートンも神を信じていました。しかしながら、これもさきほどお話にありましたが、啓蒙主義のあたりからだと思いますが、しだいに神がいなくても世界は十分説明可能であるという思いが深くなつてきて、神を抜きにして世界を説明することは可能か、という問題が科学者の中心課題になってきます。したがって、科学の歴史は神と一緒に二人三脚であるいていた科学の世界が、しだいに神の手をふりきつて、神なき世界を認識し始めていく、そういうベクトルで考えていくことができるのではないかと思っております。

進化論はその典型的な例で、キュビエとかラマルクとか、そういった進化論初期のころのヨーロッパの人々の世界観というのは、そういう世界観であつたと思われまゝ。造物主である神がすべての生物を造られたのである、そのなかでも特にすぐれた完璧な生物にして万物の霊長は人である。これは聖書のながれをそのまま投影すればこういうことになるわけですね。進化論の歴史というのはその世

界観が現実観察によつて変更されていきまして、最終的に今到達している地点は、進化は機械論的に、そして、高い許容度をもつて無方向的にすすむということになってきております。

進化は良い方向に進む、あるいは「進展」であるという概念は、まだそれを考えている科学者も多少はいるかもしれませんが、大方の生物学者はそういうものはないと考えられるようになってきました。良いものならば持続性があるはずですが、たとえば人類がいつまでいるか、これはわかりません。おそらく人類がなくなったあとに、ゴキブリが生き残っているだろうなどと、こういうことになるかと、最高の万物の霊長はゴキブリだつたということになるわけで、そんなことはわからない。つまりここには、本来的に自己中心的、自我を中心としてわれわれ自身が、この世の中心でありベストであるという思い込みが、外界の情報によつて次第に訂正され、われわれは決して世界の中心ではない。むしろ、世界の端っこのつまらん存在であるという、過大

評価が訂正されて、いきすぎた場合には過小評価になりませんが、そういうところへ向かっていくのが科学の流れであると思っております。

今日は、生物学をやりますが、物理学でも数学でもすべてにわたって同じことがいえるだろうと思います。『科学するブツダ』という本で私は、その三つの領域にわたって、どういうふうに科学が動いていくかということを仏教の世界観と関連させて書きました。これは仏教学者からすごく不評で、なにを言っているかわからないといわれて、科学者からはとてもよくわかりましたと言われて、変な評価をうけているおかしな本です。

それで、進化論をもう少し詳しく申しますと、アッシャ大司教の話はいいのですが、フランスの大博物学者キュビエあたりになりますと、天変地異説を唱えます。これはなにかといいますと、このころからようやく地中から化石が発見され始めるんですね。地中から化石が出てそれをどう考えるのか。聖書の世界観とどうやって摺合せをするのか

ということが問題になります。キュビエは次のように考えました。神は生命をお造りになった。いわゆるアダムとイヴから動物世界まですべてをお造りになり、その後、その世界は続いてきたが、ときどき天変地異が起こるのだと。たとえばノアの方舟。このような事件が繰り返し起こります。そのときに生命体のほとんどは、種のほとんどは死に絶えますと。そうするとそれをみて神様があわてて「これはもういっぺん造りなおさなければいかん」ということで、また新たに多くの種をまとめて造りなおす。その繰り返しのなかで、その減びてしまった生物種はそのまま土の中に置き去りになりますので、それが化石として出てくるのだという、これがキュビエの考えた天変地異説です。

これは明らかに、フランス革命の影響です。革命というものも正当化する、すべてを壊して新しいものをつくるのは良いことであるという、革命思想が色濃く残っております。そして、ラマルクの進化論に続きます。

ラマルクは、神が生物を造つたということは考えましたが、一齊に全部造つたのではなくて、そのタネをつくつたのだと。そのタネが自然に少しずつ神の意志を受けながら、神の意志と、それから生命体自身のもっと良いものにならなければという意志とが合一したところに、エネルギーが生まれて生命はしだいに変容していったのだと。つまりここで初めて進化論ができます。でもそれは、神を含んだ進化論です。言ってみれば常に神がサポートしながら生命体は自分を変えていったんだという進化論です。

もちろんその頂点に人間がいることは間違いありません。でもともかく、進化の輪ですべてが繋がっているという事で、ここで初めてラマルクによって生命体、生物の種は繋がっているという新しい概念ができます。宗教的世界観の中で生物がすべて繋がっていると考えるのは、このラマルクと仏教の輪廻説だけですね。これはおもしろいことだと思えます。仏教の輪廻説も生命体は全部繋がっています。生まれ変わり死に変わり、われわれもまた犬に

なったり虫になったり、餓鬼になったりしますから。

次にライエルの斉一説とダーウインの進化論が同時に出てきますが、ダーウインとライエルは大の親友です。大の仲良しでお互いの理論を認め合っていました。ただちょっとだけ違うのでそれを説明します。ダーウインがまず進化論をとなえまして、もうこれは言うまでもなく、変異と淘汰です。生命体は少しずつ、何らかの理由で変異するのである。親と子が少し違うということが絶対的恒常的に同じペースで続いています。ゆっくりと。これは普通ならばその違いはなにも影響はないのですが、そうやって少しずつ親と違う子供がずらつと何十人も何十匹もならんでいます。その中にはそのときのその外部環境に対して都合の良い形質をもった兄弟と、都合の悪い、生存確率を低くする形質をもったものとのわずかな違いがでてくる。その違いによって、子を残す確立が変わりますから当然、子を残す確率の高い親の子がのこるということで、自然に変っていくという考えかたで、この少しずつ、ほんのわずかずつ生命

は変っていくという考え方をダーウィンにもたらした、導入したのが、ライエルの斉一説であります。

ライエルは、この世の中はほんの少しずつ変っていった、どうなるかという、もとへ戻ると言います。ライエルは、将来やがて、恐竜の時代がくるであろうなんて言っているわけで、まるで輪廻か永劫回帰みたいなことをライエルは言っているわけです。ただし、ダーウィンとライエルに一つだけ違いがありました。それはなにかというと、ライエルは人間だけは違うと言いました。人間の知性だけは、その淘汰と変異で生まれたものではなく、これは神が造った絶対的な能力なのであって、これは進化で少しずつ出てきたものではないのだと言います。それに対してダーウィンが偉いのは、そんなことはない、人間のこの知性もすべて同じシステムでできたのであって、特別ではないと言うのです。ダーウィンの偉さはそこにあります。つまり神の世界から非常に大きな一歩でジャンプをして神なき世界の生物像をつくったということです。

さらにここにウォーレスの進化論が登場します。ウォーレスとダーウィンは全く同じ進化論を同じ時期にとなくま。本来ならばウォーレスの方が先に論文をだすことになっていたのですが、そうであつたら進化論の提唱者はウォーレスだということになつていたはずですが、ダーウィンがずるをしまして、ウォーレスの原稿を先に見たんですね。ウォーレスがダーウィンのところに先に原稿を送つてきたんです。「私は無名なので、この論文をあなたの力で雑誌にのせてください」と、こう頼んだんですね。で、もし載せてたらダーウィンはもうアウトだったんですが、そのときちょっとずるをしまして、どうしたかということ、二人の論文を並列で出したんですね。だからしばらくの間は、ウォーレスとダーウィン両者が進化論提唱者としてその後、数十年間は学界で承認されていきました。

ところがこのウォーレスがまた人間だけが特別だと言う、ライエル型の進化論へと変わっていくのです。ウォーレスは変異と自然淘汰というシステムはダーウィンと全く

同じことを考えます。少しずつ変化をしてそこに淘汰がかかって、よりよいものが選ばれていくと考えます。ただしダーウィンとちがうのは、ダーウィンはわれわれの身体をつくっているすべての形質が選ばれたわけではないということです。われわれの身体の形質のいくつかの特徴的な部分、淘汰によって選ばれて成立し、あとはそのいくつかの選ばれた形質を組み合わせて個体ができるときに、自然に、ひとりでに組み合わせられてきたものもある。だから言うてみれば、役に立たない、よくない、なくてもいいような形質だつてたくさんあるのだと、こう言つたわけでは

あるいはまた別の言い方でも述べました。本当はぜんぜん違う目的で進化した形質が、全く別の目的で使われることにもなったのだから、私たちのすべての形質が選ばれて、造られてきたものではないのだと言いました。その代表例が鳥の羽ですね。鳥の羽は飛ぶために出来たのではないのです。少しずつ羽は大きくなっていったので、羽が出来はじめた頃の恐竜は飛べなかった。飛べないのに羽が出来

るはずがないですね。それは勿論、寒冷期になって身体を温めるために、身体の皮膚が変化して、次第に羽毛ができてきたのですが、それがいつの間にか全く別の目的で、鳥の羽になったと。だから鳥の羽というのは決して、進化の淘汰によって飛ぶための道具として造られたものではない。ダーウィンはそこまで見通していたのです。ところがウォーレスは見通せない。だから、われわれの身体のすべての部分は淘汰を経ているわけだから、どの部分をとつても最良のものである。つまり、進化は完全な生物をつくっていくのだという考え方がウォーレスの頭から離れないわけです。

結局、ダーウィンの説はウォーレスの進化論を打ち破るかたちで、今の進化論になってきます。そして、メンデルらにつづいていくのですが、最後は木村資生の中立説までいきます。木村資生さんは三島の国立遺伝学研究所の所長だった偉大な進化学者です。中立説は画期的なものです。ダーウィンは「造物主がすべての生物をお造りになった」

ということを否定します。そして、「生物のなかでも特に優れた完璧な生物にして万物の霊長である人間」という考への「特に優れた」という部分だけをのこしてあとのところも否定します。しかし「特に優れた」というところはダーウィンは否定しなかった。なぜならば、いくつかの形質は淘汰を経て今の状態になっているのだから、淘汰というのは良いものを残し悪いものをすてるという選別作用であるから、したがって私たちは、死滅した動物よりも、今生きているわれわれの方が優れた形質をもっているというこの点だけは、ダーウィンの進化論ものこしているわけです。今も世界の大方の生物学者はこの考え方をもっています。木村資生さんはここをひっくり返します。

どういふことかという、淘汰は、悪いものを消すのであって、悪くないものは全部残すのだと言いました。さきほどのダーウィンの説では、淘汰とは良いものだけを選び取るのであって、それ以外のものを全部捨てるのだと言っています、木村資生の中立説は良いものも残るし、中立

のものも残ると言ったんです。悪いものだけが摘み取られていくといたしました。したがって、木村資生の中立説によれば、良いものは計算上ほとんどないことが分かっています。ほとんどが中立で、中立な形質というのは偶然です。DNA単位での遺伝子の偶然の変異によって役にも立たないものがわれわれの内部に出てくる。それはすべて生き残ると言いました。どれが最後まで残ってどれが消えるかは、偶然です。したがって、進化の方向性が壊れて、ベクトルがなくなり、進化はランダムであるということになります。そうすると、今のわれわれは何かということ、変異と淘汰——この淘汰というのは、なんでも残すという選別ですが——この二つの構造によって、偶然の結果、たまたまこのように存在しているということになってくるわけです。

これは、信じない人も、嫌がる人もいます。やはりわれわれの心の中には人間はサルよりはすぐれているということをおもいたい気持ちがあるのでしょうか。しかし、中立論によれば、人間とサルの間にはなんの差もないのであって、

ある変容の一過程であり、生物その一、生物その二、という、違いしかないということになりますので、これはなかなか受け入れがたいんですね。とくに、ヨーロッパの学者さんは受け入れがたいというのを聞いておりますけれども、いまこれが、どの程度まで進んでいるかはわかりません。木村先生も亡くなってしまいましたから。しかしそれは今でも、日本の生物学会のなかではかなり強い力をもっております。

以上で生物の流れについてはお話を申し上げました。一例として進化論だけを挙げましたけれども、そういった科学の流れを私は、「科学の人間化」と呼んでおります。われわれの世界はこうあるはずだという、脳の直覚が生み出す完全なる合理の世界、つまり神の世界ですね。このモデル化された世界が現実観察によってしだいに修正されていく流れであります。科学は物質世界の真のすがたを求めて論理思考を繰り返すうちに、神の視点をいやおうなく放棄させられ、気が付いたら神なき世界で人間という存在だけ

をよりどころにして、納得できる世界観をつくらなければならなくなってきた。これが現在の社会の人間のおかれている状況だと私は思います。

それでは釈迦はどうなるのか。釈迦の仏教は同じく神なき世界で、人間という存在というものだけをよりどころとして納得できる「精神的世界観」を確立するために生まれてきた宗教だということ、ここに釈迦の仏教と科学的な世界観との接点がみえてくるのであるというふうに考えております。

科学と仏教の接点としてもう一つ考えられる点が、科学的世界観の一般化により、仏教及びその他の宗教の教義が希薄化したということです。希薄化というのは、本来の、神祕の教義が成り立たなくなっていくということです。キリスト教でいえば、キリストの復活を一体だれが本気で信じるのかという話になる。仏教でいうならば、極楽浄土の阿弥陀さんがわれわれを救いあげてくれるという話をどれくらい人が本気で信じるかということになる。

一向一揆のころの人たちはみんな本気で信じて身を投げて死んでいったわけですが、今のたとえば浄土真宗の人たちにはたして、本当にあなたは極楽浄土が西にあると思いますかとか、ビッグバンを信じながら同時に極楽の阿弥陀を信じますかといったときに、おそらく非常に逡巡するでしょう。それを私は教義の希薄化というふうに考えています。そうすると、宗教が現代においても意義をもつとするならば、どういふ方向に進まざるを得ないかといいますと、それは、現代的な世界観とすりあわせた教義というものを打ち出すしかないわけです。

もつといいますと、外に極楽というものがあるという世界観を信じなくてもその浄土真宗の教えが成り立つ世界観をうみださなければなりません。そのための方策はもう決まっています、外界の神秘を内側へ折りたたむということです。つまり、神秘は心の中にあるという言い方に一括して収束していくはずですが、それを考えますと、日本の各仏教宗派、浄土真宗は極端な例なのであげましたが、他

の宗派を見ましても、その教義はすべて「こころ」というキーワードへと向かっていることがわかります。だからこれを私は「こころ教」と呼んで、現代の宗教が向かうひとつの収束点であるというふうに考えております。

もちろん、それに対して反発をする、本来的な教義を護るんだという人たちがいるのもあたりまえのことなので、そういう人達はどうよばれるかというと、これは原理主義者とよばれる。われわれは原理主義というといかにもなにか悪質なものを想像することもあります。浄土真宗の原理主義者こそが本来の宗教者であります。浄土真宗の原理主義者というのはつまり、ロケットが飛ばうがビッグバンが起こるが、そんなことはなんの関係もないのであって、西の方には必ず極楽浄土があつて、われわれは死んだらそこに必ず阿弥陀の力で生まれ変わるんだということをもう本気で信じている人が原理主義者なのですから、これは、非常にまっとうな浄土真宗信者であるということが言えます。逆に言いますと、原理主義者のタイトルをもっていないかっ

たら、本当の宗教者でないという時代になってきたということなんですね。これを私は「こころ教」と「原理主義」との二極分化への道というふうに考えております。

ですから、生物学的な今の進化論でいいますと、われわれ人間というのが単なるゴキブリと同等の生き物であるということが次第に認識されてきたときに、それでもたとえばキリスト教の神が人を造ったという話を、どう自分の中で折り合いをつけて、あるいは両面を認めながら生きていくのかということが、宗教にかかわる人間に求められるだろうと思います。

これはなかなか深刻な話です。たとえば、宗教と科学の対話ということをいいますが、実はそういう話をいつているのであって、宗教人と科学人が出会って話をするのが宗教と科学の対話ではなく、自分の心の中の宗教的世界観と科学的世界観とをどうやって折り合いをつけながら一人の人間としてのアイデンティティをつくっていくかということが実はもとめられているのであって、これを私は宗教

界の人間が真面目に率先して実践しなければならないことだと思っております。

ちなみに、私は釈迦教徒です。先程から申しております、釈迦の仏教の絶対的信者であります。それと同時に、科学を絶対的に信賴する人間でもあります。科学的に生きると同時に、釈迦の教えで生きることが、何の矛盾もなく、自分ではですね、生きているのですが、そういうことがもし、現代において宗教がありうるとするならばそういう姿がひとつのかたちであろうと思います。もちろんそれとは別の原理主義的生き方ももちろんありますし、認めなければいけません。私は、科学はいつさい認めませんという人たちもいるわけです。阿弥陀様の教えだけで生きているという人がいる場合に、その世界観も立派な生き方である。死後の世界はありますと。と認めねばならないと考えております。

それで、今後の宗教のあり方としては、「こころ教」というものが大勢をしめるということになると思います。各

宗教団体のキャッチフレーズがみなそういう段階に進んでいることがそれを明確に示しています。

私の判断ですが、「こころ教」は三つのことばで成り立っている。ひとつは「こころ」という言葉。そして、「いのち」。それから「生きる」という動詞です。この三つのチームがさまざまに交差し、繋がってそれを受身形にしてみたり、未来形にしてみたりいろいろな変容をあたえることが「こころ教」のキャッチフレーズになっております。最近は何の素も「こころ教」になってきたらしくて、味の素のキャッチフレーズは「おいしさ、そしていのちへ」です。私はテレビを見ながら「こころ教だ」と思っているわけです。

「こころ教」が悪いとは言っていない。今のこの科学的な世界観で宗教というものが人の役に立って活動するならば、「こころ教」は仕方のないことでありますし、あるいはそれで人を救うこともできます。先日あるシンポジウムでも話が出たのですが、本山や中央の人たちは原理主義

的なことばかり言うけれども、末端のお寺さんたちは、親鸞さんがどうこう言ったと、そんなこと言っている暇はないので、地元の人たちとどう付き合っただう向き合っただうの世界を広げていくか、それで必死なんだという話が出ました。そういう人たちが生きる道は決して本質的な原理主義ではなくて、これは「こころ教」でしかありえません。

みなさんの「こころ」「いのち」そういうものをわれわれが引き受けますという言い方で仏教徒の接点を持つしかないわけですから、この「こころ教」を否定してしまったり、宗教の存在そのものが非常に危うくなるだろうと思います。宗教はなくてもいいというならそれでもいいですけれども、宗教はあるべきだと思う以上はこころ教の存在価値というものを認識しておく必要があると思います。

そういうわけで、「こころ教」が現代において何を果たすべきか、ということになってきますが、宗教によって恩恵を受ける側の人たち、つまり、宗教を与える宗教界の間ではなく、宗教によって私たちはどんなよいことをして

いただけるのですかと尋ねるひとたちに対する答えも、宗教界の人間はきちつと用意しておかなければいけないと思います。

宗教の定義はできないのですが、私なりに考えているのは「宗教」というのは生きることが本質的に苦しいと考えている人たちが、その苦しみの外的な条件を除けない場合に、心の内部の働きによって、生きる苦しみを消したいと願う、それを可能にする道が宗教だろうというふうに考えております。そういう意味では今の時代に宗教が必要がなはいはががないのであって、生きることが苦しいことだと考える人がいるかぎりにおいて、宗教は絶対的に必要であります。

それで、生きる苦しみとはなにかということなのですが、釈迦の時代はこれを四つのチームで表しております。それは「生老病死」です。生きていること、生存能力に従って生きなければならぬという生存本能の苦しさ。それから年をとる、老人になるといような、外界からの不幸の

襲来。これを釈迦は「生老病死」という見事なチームで表してくれた。つまり、釈迦が考えた宗教の働きとは、「生老病死」を自覚して、その苦しみから逃れることができないうという絶望状態に陥った人に、希望を与えて生きる道を与えるということなのでしょう。それを現代に合わせてみると、「生老病死」でいいのかというと、実はとんでもないことになっていくことがわかりまして、「生老病死」ではすまない、釈迦の時代になかった苦しみが次々に生まれていることに気づきます。

私はそれを「生老病死インターネット」と言っています。インターネットは一例ですが、インターネットの苦しみは、例としては匿名で嵐のようによせられる批判、非難。それが人間をどれだけいま苦しめているかと考えますと、これは「生老病死」と並ぶ苦しみだと思います。条件としては、まず、匿名であるから、だれがその苦しみを自分に与えたかは一切特定できないということ。それから、その苦しみは、じつとしていても向こうからおそいかかってくるとい

うこと。こちらが何かをしたからやってくるのではなくて、じっとしているうちにその苦しみが突然やってくるのだということ。それからもう一つは、襲いかかってきた苦しみが絶対に消すことができないということ。これは「生老病死」は死んだらおしまいです、インターネットの苦しみは死んでも消えませんが、孫子の代までその情報が残っているわけですから、それを思いますとインターネットの苦しみは「生老病死」あるいはそれ以上の苦しみを人に与えるものだと思います。しかもそれは今までなかった、新たな苦しみです。

従いまして、宗教が生きることを苦しみだと感じる人がいることによって存在意義をもつのであれば、今は存在意義が増えているのではないかとこのように思います。宗教者はそういうものに目を配って、どんな苦しみが増え続けているかということをもモニターングして、それに対する解決策を常に考え続けていくというのが、こころ教であるところが原理主義であろうが、ともかく宗教の存在するため

にそういう働きが必要なのではないかと思えます。例えばクローンの技術、あれもこれからの苦しみです。「あなたはお父さんやお母さんの子ではありません、どこかの知らない人の爪の垢からできたような人間です」という宿命を背負う人間がこれから増えていくわけですが、それもまた自分の責任でなく、一生消すことができない苦しみとして残りますから、これもまた宗教が救うべき対象として一つ増えたというふうに私は考えております。だんだん自分の思いの話になってしましまして申し訳ありませんでした。もっと客観的に科学的に話をしようと思いましたが、話の内容は次第に私の思いになってしまいました。この場にふさわしかったどうかはわかりませんが、どうぞおゆるしください。終わります。

ささき・しずか
花園大学教授